

平成24年度「特別支援教育総合推進事業（特別支援教育に関する教育課程の編成等についての実践研究）」報告書

団体名	長野県
研究開始年度	平成24年度

## I 概要

### 1 指定校の一覧

設置者	学校種	学校名（ふりがなを付すこと）
長野市	小学校	徳間小学校（とくましょうがっこう）
長野市	小学校	七二会小学校（なにあいしょうがっこう）
塩尻市	小学校	吉田小学校（よしだしょうがっこう）
上田市	小学校	神科小学校（かみしなしょうがっこう）

### 2 研究テーマ

授業のユニバーサルデザイン化及び、児童の教育的ニーズに応じる連続的な教育対応に関する研究

### 3 研究の内容

（研究内容）

小中学校において、通常の学級に在籍する発達障害のある児童生徒に対し、的確な実態把握の上で、適切な指導及び必要な支援を行うことが求められている。特に、一部特別な支援が必要な児童生徒に対しては、各学校において弾力的な校内支援体制を構築し、適時適切な指導・支援を行うことが求められている。また、発達障害のある児童生徒等が、自立と社会参加に向けてできる限り集団の中で学ぶことが大切であり、通常の学級において、発達障害のある児童生徒も含めすべての児童生徒にとって楽しく「分かる・できる」授業の実践が求められている。

そこで、モデル研究校を指定し、以下の3点を中心テーマに据えて研究を進めた。

#### 1) 「授業のユニバーサルデザイン化」に向けた実践研究

・発達障害等のある児童生徒を含め、すべての子どもが楽しく「わかる・できる」授業の実践的研究

#### 2) LD等通級指導教室担当教員による巡回支援の実施

・一部特別な支援を必要とする児童生徒に対する連続的な教育対応のひとつとしての実践研究

#### 3) 連続的な教育対応を展開する校内支援体制の構築

・校内外の資源（人・場）を弾力的に活用して、必要な支援を柔軟に展開する方法などの開発

(評価の観点及び評価方法)

<評価の観点>

- ・個別の指導計画に基づく指導を通常の学級における授業において、計画的・組織的に位置付ける方法が明らかになったか。
- ・発達障害のある児童生徒も含めすべての児童生徒にとって楽しく「分かる・できる」授業への質的な向上（改善）が図られ、そのプロセスが明らかになったか。
- ・通常の学級を基盤に、教育的ニーズに応じて連続的で多様な教育対応を展開する校内支援体制が構築され、「人・場・時間・対象者・内容・方法」など、総合的に運営する上でのポイントが明らかになったか。

<評価方法>

- ・モデル研究担当者会を開催し、各校の取組を情報共有するとともに、研究の成果と課題を明らかにする。
- ・各モデル研究校において授業研究会を実施し、指導主事や外部指導者からの指導助言を受ける。
- ・各校への通級指導教室担当教員及び指導主事の複数回訪問を実施し、授業づくりや個別の指導計画の作成と活用に係る指導・助言を受ける。（研究内容）

#### 4 研究成果の概要

##### 1) 「授業のユニバーサルデザイン化」に向けた実践研究について

<成果>

- ・配慮を要する子どもの「個別の指導計画」の作成を通して、「子どもの実態把握⇒力を発揮できる状況の検討⇒授業の中での個への支援や授業全体の工夫⇒評価と見直し」といった授業改善の流れが明確になってきた。
- ・「本時に向けた個別の指導計画」といった、簡略的で通常の学級担任が日々の授業に活用できるようなシートを開発し、授業の中で予想される子どものつまずきを前もって捉え、それに対する具体的な支援や授業の工夫を用意し、授業に臨むことが日常的に意識できるようになってきた。
- ・考えられる子どものつまずきを前もって取り除いておくユニバーサルデザイン、（環境調整、視覚支援、発言ルールの明確化等は、学校全体で取り組み、すべての教師が意識していくことにより、どの子にとっても、参加しやすい学校、学びやすい教室につながる）ことが共通理解できてきた。

<課題>

- ・「授業のユニバーサルデザイン化とは」を、その意味や視点、授業づくりの流れ等をさらに、教師にとって分かりやすく整理していく必要がある。このような取組は、学校全体、教師全員が共通理解をした上でこそ、さらに効果があがると思われる。
- ・授業への参加を促す環境調整や認知のかたよりに配慮した視覚支援などの取組は、教師にとって共通理解しやすく取組も多く見られるようになってきたが、教科指導の側面からの「楽しさ、分かりやすさ、活動のしやすさ」等は、さらに追究していく必要がある。

## 2) LD等通級指導教室担当教員による巡回支援の実施

### <成果>

- ・「このような力をつけるために、一部取り出しての指導が必要である」という、教育的ニーズを明確にしていくことを通して、個別の指導計画の作成と活用につながり、巡回先の学校の教師の支援力を高めることにつながる。
- ・普段の学びの場である巡回先の通常の学級での対象児の姿、学級の中でのつまずきの要因等を知ることができ、通級による指導での教育的ニーズがより明確になる。
- ・通常の学級での姿から、その学級への汎化、その学級の中でも使える支援を目指した学習課題を設定しやすくなる。

### <課題>

- ・原則、保護者による送迎と学習場面の参観がある他校通級と違い、保護者が学習場面を参観することが少なくなり、保護者との連携や共通理解に課題がある。保護者との連携方法や連携ツールの開発が必要である。

## 3) 連続的な教育対応を展開する校内支援体制の構築

### <成果>

- ・この研究を通して、特別支援教育は、「一部の担任が行うものでなく、全校体制で行うもの」という意識がモデル校の全職員に浸透してきたことが大きな成果である。
- ・単に、対応する「場、人、時間」のみを設定しても、効果的な支援にはならない。児童の実態把握から、具体的な支援の検討、場・人・時間等を校内委員会等で検討できる機能も含めて、連続的な教育対応を展開する校内体制であることが、あらためて見えてきた。

### <課題>

- ・機能する校内委員会等の在り方、運営の流れ等をさらに整理、検討する必要がある。
- ・学校規模や教師の人的配置に応じた、校内委員会や支援体制の事例をさらに集積する必要がある。